[Hondaの交通安全情報紙]

SJ

Since1971

SJ ホームページは ホンダ　SJ 検索

●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107- 8556 東京都港区南青山2－1－1
TEL 03（5412）1736　http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
●編集人：原田洋一

※ご不明な点がございましたら、
下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ
安全運転普及本部係
TEL 03（5439）1191
E-mail：sj-mail@spirit.honda.co.jp

SAFETY-JAPAN

Safety for Everyone
Honda はすべての人の
交通安全を願い活動しています。

2016
10・11
October・November
NO.480

CONTENTS

P1 特集：福祉領域における Honda の活動の拡がり
お身体が不自由になった方々の
運転復帰までのプロセス構築を支援
P4 教育最前線／Honda の高校生交通安全教育
P5 TOPICS①／Honda 秋のセーフティキャンペーン
TOPICS②／Honda Cars 福岡・
ファミリー安全運転講習会
TOPICS③／第 47 回全国白バイ安全運転競技大会
P6 FRONT LINE ／ Honda 安全運転コーチング
開発プロジェクト
P7 危険予測トレーニング（KYT）／幹線道路の右側
車線を走行している時（四輪車編）
SJ クイズ
指導者ファイル／（一財）岡山県交通安全協会
児島交通安全協会 シルバーセーフティサポーター
P8 SAFETY FOCUS ／山梨県甲府市

特集
福祉領域における
Hondaの
活動の拡がり

お身体が不自由になった方々の運転復帰までのプロセス構築を支援

Hondaでは高次脳機能障がい等でお身体が不自由になった方々の社会復帰に向けた安全な移動手段の確保のため、自動車運転能力評価や訓練の機会を提供している。そして、この取組みを拡げていくために、病院や福祉団体との連携も進めている。今回はHondaの地域における運転復帰までのプロセス構築を支援するための活動や、Hondaの福祉安全運転プログラムの拡がりを紹介する。

脳卒中等により高次脳機能障がいとなった人が自動車運転（以下、運転は自動車運転を指すものとする）を再開しようとした時、その人の運転能力を評価できる医療機関はまだ少ない。それは運転の可否判断に必要な評価項目や基準が明確になっていないからだ。そこで、ホンダは、長年蓄積してきた安全運転教育のノウハウを活かし、医療関係者の運転能力評価をサポートするためのソフトやプログラムを開発し、普及に努めている。こうした取組みを推進する背景には、運転復帰を希望するお身体が不自由な方々を支援することで、そうした方々に運転する喜びをあらためて感じていただきたいという想いがある。

地域における運転復帰プロセス構築への支援

病棟施設の中でできる停止車両評価を考案

ホンダは医療現場が抱える運転の能力評価の課題解決をめざし、地域における運転復帰プロセスの構築を支援している。その一環として一昨年から、四国4県の病院・リハビリテーションセンターとともにプロジェクトを立ち上げ、議論と試行を続けている。四国地域は移動手段としての自家用車の依存度が全国平均より高く、病棟施設等において運転復帰に向けた相談も増加している。運転能力の評価方法と判断基準の明確化は喫緊の課題であり、解決に向けた取組みを実践することが求められているのだ。そこで、ホンダは徳島県、香川県、愛媛県、高知県、淡路島（兵庫県）で患者の運転復帰支援に積極的な病棟施設等に横断的な連携を呼びかけ、2014年11月に「四国運転リハプロジェクト（以下、四国プロジェクト）」を立ち上げた。

四国プロジェクトのメンバーは、作業療法士や社会福祉士として社会復帰をめざす人を支援している方々だ。メンバーが所属している病棟施設等では障がいをお持ちの方の運転能力の評価方法として、机上検査とセーフティナビ（ホンダが開発した簡易型四輪ドライビングシミュレーター）を使った運転能力評価サポートソフト※を組み合わせている。しかし、すべての病棟施設にシミュレーターが設置されているわけではなく、こうし

●四国運転リハプロジェクトの主要メンバー

プロジェクトリーダー
徳島健祥会福祉専門学校・
（一社）徳島県作業療法士会会長
岩佐英志さん（写真前列中央）

副リーダー
近森リハビリテーション病院
矢野勇介さん（写真前列右）

総合リハビリテーション伊予病院
楠哲郎さん（写真後列左から２番目）

かがわ総合リハビリテーション事業団
大野香織さん（写真後列右から２番目）
上川毅さん（写真前列左）

伊月病院
山下旭さん（写真後列右）

洲本伊月病院
坂本敏行さん（写真後列左）

※運転能力評価サポートソフト＝リハビリ加療中の方の運転能力を病院内で評価し、運転復帰のための実技訓練に移れるかの判断をサポートするソフト。詳細は右記ホームページを参照。http://www.honda.co.jp/safetyinfo/program/rehabilitation/supportsoft/

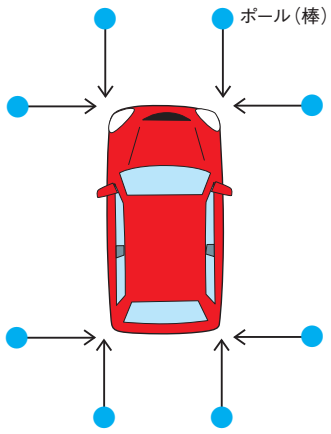
特集 福祉領域におけるHondaの活動の拡がり

お身体が不自由になった方々の運転復帰までのプロセス構築を支援

た評価方法も十分なものとはいえない。四国プロジェクトでは運転能力の評価方法と判断基準を確立し、それを四国4県さらには全国の病棟施設等に普及させることを目標としている。

プロジェクトリーダーである徳島健祥会福祉専門学校の岩佐英志さんは「地域性や施設の規模に関係なく、運転能力を評価できる手法を模索しました。そのため、病棟施設の中でできることは何かを考えたのです」と振り返る。そして、四国プロジェクトが導き出した答えが停止車両評価だった。文字通り、停止状態のクルマを活用して運転に必要とされる能力を評価するものである。このアイデアは四国プロジェクトに協力していたホンダが発した「止まっているクルマを使えば、駐車場1台分のスペースで何かできるのではないか」という一言がきっかけだった。最初に、それを聞いた時、メンバーの誰もが「動かないクルマで一体何がわかるのだろう」と思ったそうだ。

副リーダーを務める近森リハビリテーション病院の矢野勇介さんは「私たちに止まっているクルマを使うという発想はまったくありませんでした。しかし、クルマが1台あれば、確かにどの病院でもできるのです」と話す。



停止車両で車両感覚を評価する様子（写真は健常者のデータ収集時のもの）

四国プロジェクトではホンダの協力を得ながら、停止車両で何が評価できるのかを検討した。その結果、クルマへの自力での乗降、運転姿勢と姿勢保持、ハンドルやブレーキ等の操作力といった身体機能だけでなく、視野や距離感覚、位置感覚等の高次脳機能を評価できることがわかってきたのである。例えば、車両感覚を評価する時は目印になるようなポール（棒）を停止車両の前後左右の8つの方向から近づけ、車体の前方および後方の右端・左端にポールが来たと認識したら手を上げてもらう（写真左上参照）。そして、各方向から確認できたポールと停止車両の距離を記録。これを2回実施し、「目安値を大きく外れていないか」「左右で差が顕著に見られないか」等を確認するのである。目安値は健常者80名から収集した結果をもとに算出している。

運転再開の可能性を拡げるための手順と選択肢を示す

四国プロジェクトは実際に運転復帰をめざす方に停止車両評価を体験してもらう等の検証を進め、その妥当性を確認した。矢野さんは「シミュレーター以上に評価結果に対する本人の納得性が高いことがわかりました。自分の身体機能がどのように変化しているかを実感でき、どのように身体を使えばその変化を補えるかを考える機会にもなります。体験した方々のほとんどが、止まっているクルマに乗るだけでも『楽しかった』とおっしゃるのが印象的でした」と、停止車両評価に手ごたえを感じている。そして、自動車運転能力評価フローに停止車両評価を組み込むことを決め、評価項目や評価ポイントをまとめた「評価表」を作成した。

プロジェクトリーダーの岩佐さんは「私たちはリハビリ加療中の方の運転復帰への可能性を少しでも拡げたいと、その手順と選択肢を追求してきました。運転する上での課題が把握できれば、それを補うために能力を訓練したり、クルマの改造によって安全に運転してもらうための環境を整えることができます。この成果を発信して、地域の病院に根づかせていきたい」と語る。現在、四国プロジェクトでは停止車両評価の方法等を詳しく解説したマニュアル「自動車運転再開ガイドブック」の作成を進めている。これが完成すれば、同じ課題を抱えている病棟施設等に配付するほか、岩佐さんが会長を務める（一社）徳島県作業療法士会のホームページで公開する予定だ。

四国プロジェクトはメンバーにとっては、どのような意義があったのだろうか。主要メンバーの皆さんに話を伺った。

「運転復帰を支援する上で必要な知識や情報を身につけられ、医師やご家族に自信を持って説明できるようになりました」（かがわ総合リハビリテーション事業団・大野香織さん）。「運転復帰の支援については、病院や教習所が個別に試行錯誤しているのが現状です。それらをつなげることが必要で、その仕組みづくりのヒントがこのプロジェクトにあると感じました」（同・上川毅さん）

「シミュレーターを活用して、運転に対するリハビリに取り組んでいますが、自分たちが独自に行っているものです。それが本当に正しいのか不安を持っていましたが、評価方法や判断基準を他のメンバーと整合できたので、その不安を解消することができました」（伊月病院・山下旭さん）。

「このプロジェクトに参加するまで、運転復帰に向けての支援を敬遠する傾向にありましたが、他のメンバーの考え方を聞くことでモチベーションも上がり、前向きに取り組めるようになりました」（総合リハビリテーション伊予病院・楠哲郎さん）。

このように、四国プロジェクトはメンバー各々に取組みへの自信を与えたといえるだろう。

「1つの病院が単独で他の病院に声をかけるというのはなかなか難しいことです。ホンダが私たちを結びつけてくれたことによって、プロジェクトを実現できたといえます。また、クルマや運転のプロとしての視点で様々なアドバイスをもらえたので議論がより深まりました。医療関係者だけでは、ここまでの成果を生み出すことはできなかったと思います」と、岩佐さんをはじめメンバーはホンダによるサポートに対して感謝の意を表した。

●四国運転リハプロジェクトによる自動車運転能力評価フロー

自操安全運転プログラムの拡がり

地域の自動車教習所へノウハウを提供

机上検査やシミュレーター、停止車両での運転能力評価の先には、実際にクルマを走らせての評価がある。それをサポートするのが、ホンダが開発した自操安全運転プログラム（以下、自操プログラム）だ。リハビリ中の方が運転を再開する際の評価や訓練をサポートすることを目的としている。実車による体験を重ねることで、運転基礎感覚（方向・速度・車両・位置・距離・直進）と運転基本操作（走る・曲がる・止まる）を確認できるのが特色である。

全国7ヵ所にあるホンダの交通教育センターで展開しているが、希望者が近隣地域でも受講できるように、ホンダは自動車教習所にもノウハウを提供している。既に弘前モータースクール、青森モータースクール、八戸モータースクール、浪岡モータースクール（いずれも青森県）、津嘉山自動車学校（沖縄県）が導入。これらの自動車教習所では、運転復帰を希望される方へのサポート体制を充実させるために、ホンダからノウハウ提供を受けた。青森モータースクールでは2名、八戸モータースクールでは1名、津嘉山自動車学校では26名が自操プログラムを受講している。

今後、全国の指定自動車教習所にも取り入れられる予定だ。地域の自動車教習所を通じて、近隣の病院やリハビリ施設での自操プログラムの活用が進むことが期待される。

自動車教習所にも普及している自操プログラム

移送安全運転プログラムの拡がり

送迎運転者に対する実技による教育を可能に

高齢化が進むことでリハビリ施設やデイケアセンターへのクルマでの送迎を利用する方が増えることが予想される。ホンダは送迎中の交通事故を予防し、利用者の安全で安心な移動を確保するため、送迎運転者向けの移送安全運転プログラム（以下、移送プログラム）を開発した。送迎車の利用者の中には健常者なら気に

特集 福祉領域における Honda の活動の拡がり

お身体が不自由になった方々の運転復帰までのプロセス構築を支援

やまがた福祉移動サービスネットワーク代表の齋藤丈夫さん

ならない加速や減速でも自分で身体を支えきれないことがあるため、アクセル、ブレーキ操作への配慮に加えて、乗降時、搭乗中の際の安全確保や周囲への配慮が必要になる。移送プログラムは安全運転のスキルを身につけるだけでなく、利用者をはじめ他のクルマや歩行者に対する思いやりや配慮の大切さを送迎運転者に理解してもらうことを目的としている。

現在、ホンダは送迎サービスを提供する団体等に移送プログラムを活用してもらうことで、送迎運転者への安全運転教育のさらなる充実ならびに場と機会の拡大を図っている。群馬県では、群馬県住民参加型在宅福祉サービス団体連絡会が県内各地で福祉サービス送迎運転者講習会を開催している。同連絡会では、より実践的な内容を求める受講者の声が高まったため、移送プログラム導入を決めた。昨年10月、鈴鹿サーキット交通教育センターのインストラクターが講習会担当者等を対象にプログラムの体験会を実施。平成28年度は実技演習を取り入れた講習会を2回開催する計画になっている。

また山形県では、やまがた福祉移動サービスネットワークが県内4地区で福祉・介護施設のための施設送迎運転者勉強会を展開。これまで、送迎の運転に必要な知識と心構えを伝えるための講義や、送迎中の事故事例を基にしたグループ討議を行っていたが、今年9月から移送プログラムを取り入れた。やまがた福祉移動サービスネットワーク代表の齋藤丈夫さんは「送迎中の交通事故や、乗降中の転落事故が起きてしまった場合、同乗している利用者がダメージを受けます。福祉・介護施設を利用される方々を被害者にさせないためには、送迎運転者への安全教育が必要だと考え、2年前から勉強会を始めました。その後、移送プログラムのことを知り、勉強会の中に実技演習として取り入れようと思ったのです」と話す。

やまがた福祉移動サービスネットワークでは7月に鈴鹿サーキット交通教育センターのインストラクターを山形市に招き、勉強会の指導者養成のため山形県内から集まった10名を対象に移送プログラムの講習会を実施。そして9月4日、新庄自動車（株）（山形県新庄市）の工場敷地内で開かれた施設送迎運転者勉強会で、移送プログラムをベースにした実技演習を行った。この日の受講者は13名。送迎を担当して半年程度という受講者も数名いる。実技演習は、やまがた福祉移動サービスネットワーク事務局長の本間博さんが講師となって進められた。

本間さんは日常点検の全項目を説明した後、運転席から見えない死角の範囲が前後左右でどのくらいあるかロープを使って、受講者に示していく。さらに、フロントのピラー（窓枠）やサイドミラーも死角をつくり出していることを補足した。

そして、受講者は自分たちが日頃使用している送迎車両に乗り、パイロンで囲まれたスペースの中で前進・後退を繰り返す。さらに、同じエリアの中でハンドルをきりながら前進・後退。この時、運転しない受講者は送迎車両の後部座席や車内に設置されている車いすに座わる。その時、背もたれに背中をつけず、足はかかとを上げた姿勢をとり力を入れて身体を支えられない状態をつくり出す。利用者の視点に立って、運転者のハンドル操作が及ぼす影響を感じてもらうためだ。

勉強会を終えた受講者は「後部座席に乗っていた時に、少しの揺れでも繰り返されると気分が悪くなりました。利用者の方も、普段そういう思いをしていたのだと気づきました。これからは利用者の方の立場を意識して運転したい」と感想を語った。

今回初めて移送プログラムによる指導を担当した本間さんは「福祉・介護施設では、軽自動車しか運転したことがない人が、送迎用の大きな車両を運転しなければいけなくなることもあります。このプログラムは、そういう人の不安を払拭するのに有効だと感じました。この勉強会、移送プログラムを通じて〝気づいた〟様々なことを職場の仲間と共有してもらうことを期待しています」という。勉強会は年内に3地区で実施される予定だ。やまがた福祉移動サービスネットワークは今後、どのような指導項目に時間をかけるべきか検討し、ホンダのノウハウをベースに山形県独自の実技演習をつくり上げていく考えだ。

ホンダは「より多くの人にクルマを操る楽しみを提供したい」「交通社会に参加するすべての人の安全を守りたい」という理念に基づき、今後もお身体の不自由な方々や高齢者の方の安全な移動手段の確保のために取組みを推進していきたいと考えている。

ハンドルをきりながら前進・後退を繰り返す。運転しない受講者は後部座席に座り、利用者の立場を体験する

実技演習では、やまがた福祉移動サービスネットワーク事務局長の本間博さんが運転席から見えない死角の範囲を説明

●視覚障がい者 夢の自動車運転体験ツアー

視覚障がい者の方々にも運転する喜びを感じていただくために

9月20、21日の両日、Hondaの交通教育センター、アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ（以下、ASTP）で「視覚障がい者夢の自動車運転体験ツアー」が開催された。

このツアーは旅行会社のクラブツーリズム（株）が主催。同社テーマ旅行部ユニバーサルデザイン旅行センター課長の渕山知弘さんが「あるツアーに参加した視覚障がい者の方から『一生に一度でいいからクルマの運転をしてみたい』という夢を聞き、何とか実現させたい」と2010年から始めたものだ。現在は年2回開催しており、ASTPでは2013年からツアーを受け入れ、運営に協力している。

10回目の開催となる今回は15名の視覚障がい者の方々が参加した。運転体験は助手席に補助ブレーキが付いている車両を使用し、カーブや直線を組み合わせた様々なコースを走行する。運転に必要な情報は助手席に同乗するASTPのインストラクターが受講者に伝達。ハンドルをアナログ時計の文字盤に見立て、左手を9時、右手を3時の位置で握ってもらう。カーブを曲がる時は左手の位置で指示。左カーブなら「8時、6時」、右カーブなら「10時、12時」と伝える。これに合わせて、アクセルやブレーキの踏み加減を指示することで、スムーズな運転ができるのである。

千葉県から参加した女性は「インストラクターの指示がわかりやすく、楽しく運転できました。アクセルやブレーキを踏むのには力がいると思っていましたが、意外に軽かったのが驚きです。いつか、マニュアル車の運転も体験してみたい」と笑顔を浮かべた。東京都から参加した男性は「自分はいつも乗せてもらう立場なので、クルマに乗ったら、すぐにスタートするイメージでした。実際に運転を体験してみて、ドライバーは発進するまでに様々な手順をふんでいることがわかりました」と感想を語ってくれた。

このツアーは9月22日に「第2回ジャパン・ツーリズム・アワード」（主催：（公社）日本観光振興協会、（一社）日本旅行業協会）で国内・訪日領域優秀賞を受賞。来年3月にはASTPで11回目のツアー開催が決定している。

教育最前線　連載42

●Hondaの高校生交通安全教育

生徒への交通安全教育を円滑に運営できるよう、高校の先生方へ向けて「指導マニュアル」を提供

福島県立福島工業高等学校の1年生を対象に7クラスの担任の先生方がHondaの感受性教育を実践

高校生世代は、交通社会の一員としての責任を自覚した行動が求められ始める時期である。ホンダは生徒自身が交通安全について主体的に考え、自らが交通事故から身を守れるようになるとともに、他の交通参加者への思いやりの心を身につけてほしいという考えのもと、高校生交通安全教育プログラムを2012年に開発、全国の高校に拡げてきた。そして、活動意志のある高校が自主的に運営できることをめざし、「高校生交通安全教育指導マニュアル（以下、指導マニュアル）」を完成させた。この指導マニュアル（DVD／CD）には、高校生の自転車による交通事故の防止を目的とした「感受性教育」「実技教育」といったプログラムを収録。それぞれの教育内容について映像を使って解説している。

指導マニュアルをもとに先生方が主体的に実施

福島県立福島工業高等学校では、2013年からホンダの高校生交通安全教育を取り入れている。同校生徒指導部主事の渡部浩一教諭は「生徒の9割近くが通学に自転車を利用していますが、『自分は自転車の運転が上手いから大丈夫』と過信している生徒が少なくないと感じています。それが事故や交通違反につながる恐れがあるので、生徒の注意喚起を促すことを目的として、ホンダの高校生交通安全教育を実施しています」と話す。

同校では先生方が主体となって交通安全教育を継続している。それができるのは、ホンダから提供された指導マニュアルがあるからだという。

9月14日には5時限目・6時限目（各50分）を使って、1年生7クラス279名を対象に交通安全の授業を行った。これに先立ち、渡部教諭は指導マニュアルを使って生徒指導部だけでなく、担任の先生方とも進め方を共有した。

5時限目は体育館に生徒を集め、渡部教諭による座学教育。6時限目は当初、「実技教育」を予定していたが、前日の雨の影響で校庭のコンディションが不良のため、各クラスに分かれての「感受性教育」となった。

クラス担任を巻き込み学校全体の意識を高める

「感受性教育」とは、実際に中学生・高校生が加害者となった自転車事故の事例から交通事故の怖さ、周囲への影響、事故に伴う責任の重さについて学び、グループ討議の手法を使い、自分の考え方や行動を見直すことを学ぶものである。

1年生の担任の一人、五十嵐航介教諭は6つの事故事例の中から、交差点でのクルマと自転車の出会い頭事故を題材にした。「交通安全の授業を行うのは今回が初めてですが、指導案とワークシートが用意されていたので、スムーズに授業を進めることができました。他校での事例も映像で見ることができたので、授業のイメージもつかめました」と、五十嵐教諭はいう。

渡部教諭も指導マニュアルは教育のフォーマットがきちんと出来上がっている点を評価する。「これを見て準備をすれば、教員なら誰でも効果的な交通安全教育が実践できると思います」。

感受性教育を受けた生徒は「高校から自転車通学を開始しましたが、話し合いの中で友人の体験などを聞いて、自分も事故に遭う可能性があることを再確認しました。見通しの悪い交差点では、きちんと安全確認しようと思います」と授業の効果を語ってくれた。

渡部教諭は、感受性教育は担任の先生方が主体的になって指導することに意義があると感じている。「クラス単位で担任の各先生がやることで、私たちの意欲も生徒に伝わりやすいし、先生方も交通安全教育が難しいものではないことがわかるはずです。実践できる先生が増えることによって、学校全体の安全意識も高まっていくでしょう」。

感受性教育は一方通行ではなく、生徒に意見を出させるというワークショップ形式となっている。渡部教諭は、こうした授業を経験することで、先生方にも新たな気づきがあり、自分たちの教える技量の向上にも役立つと語っていた。

ホンダでは、この指導マニュアルを広くご活用いただき、高校における交通安全教育の一助となればと考えている。

生徒指導部主事の渡部浩一教諭。感受性教育に先立って行われた座学教育を担当した

「高校生交通安全教育指導マニュアル」では、高校生の自転車による交通事故の防止を目的とした「感受性教育」「実技教育」について映像等を使って解説。指導案や生徒用のワークシートも含まれている

昨年は校庭で生徒指導部とクラス担任の先生方による自転車の実技教育を実施した

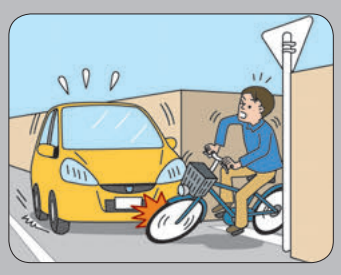
●同校の実施状況

	2013年	2014年	2015年	2016年
感受性教育			●	●
座学教育	●	●		●
実技教育		●	●	※

※雨天のため、感受性教育に変更

●感受性教育

五十嵐航介教諭は交差点でのクルマと自転車の出会い頭事故の事例を使って進めた



「なぜ事故が起きたのか」など、ワークシートに生徒が自分の考えを記入

班ごとに討議し、それをクラス全体で共有するため、討議の結果を黒板に書き込む

自分がこれまでに遭遇した交通事故やヒヤリ体験を発表し合う

2016 トラフィック・セーフティ・フォーラム in 埼玉」開催　参加無料

●主催：交通教育センターレインボー埼玉、交通教育センターレインボー和光

テーマ『職場内の安全は、交通・労働・健康のトライアングル』
日時：2016年11月24日（木）午後1時00分～午後4時30分（予定）
会場：ソニックシティ 小ホール
（埼玉県さいたま市大宮区桜木町1-7-2 ホール棟2階／JR大宮駅西口下車 徒歩3分）
定員：400名（予約制）
申込：下記ホームページより参加申込書を印刷の上、FAXにてお申込みください。　http://www.tec-r.com/
締切：2016年11月11（金）※定員に達し次第、締切

内容：事例発表／ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）蒲博史氏、（株）本田技術研究所 二輪R&Dセンター 吉川達也氏
講演／「睡眠呼吸障害の早期発見・早期治療による安全向上と健康増進」順天堂大学大学院 医学研究科 公衆衛生学講座　谷川武氏

<お問い合わせ先>
交通教育センターレインボー埼玉 フォーラム事務局　※月曜日定休
TEL：049-297-4111　FAX：049-297-6273

TOPICS

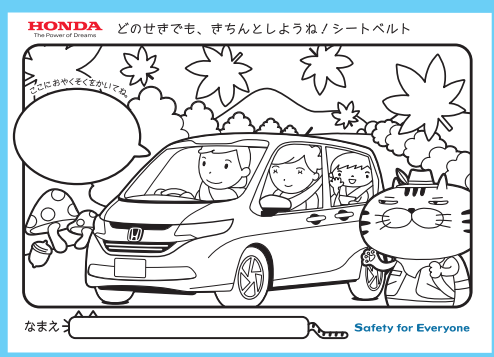
01 Honda 秋のセーフティキャンペーン
声かけでワンポイントアドバイス
～ All Honda で交通安全活動を実施～

Honda では 9 月 19 日～ 10 月 31 日の期間、「2016 年 Honda 秋のセーフティキャンペーン」を実施している。期間中は、Honda 及び Honda 関連企業の従業員、販売会社のスタッフが一丸となって、「無事故・無違反の継続活動の実施」を宣言し、自ら率先して交通安全を実践。また、販売会社を含む Honda 及び Honda 関連企業の事業所には、「交通安全啓発のぼり」を掲示し、従業員・お客様・地域の方に広く交通安全を訴求する。

Honda の四輪販売会社では、啓発冊子や映像を活用しての全席シートベルト着用の声かけに取り組んでいる。また、店頭、近隣地域の保育園・幼稚園にて、「あやとりぃ ひよこ編」を活用した交通安全教室を開催している四輪販売会社もある。一方、二輪販売会社ではお客様に安全なツーリングを啓発するためのパンフレットの配布を行っている。

●交通安全ぬりえ ダウンロード

ホンダ　2016　セーフティキャンペーン　検索



ダウンロードした「交通安全ぬりえ」に色をぬって、家族で決めた交通安全の約束を書いたら、下記宛にお送りください。応募者全員に ASIMO えんぴつをプレゼント！

【応募締切】
2016 年 11 月 10 日（木）

【送付先】本田技研工業（株）安全運転普及本部　交通安全ぬりえキャンペーン事務局行
〒 107-8556 東京都港区南青山 2 － 1 － 1

※送付いただいたぬりえは、ASIMO えんぴつと一緒にご返送いたします。
※お申込みいただきましたお客様の個人情報は、発送業務以外の利用は致しません。

「あやとりぃ」を使ったお子様向けの交通安全教室

02 ●Honda Cars 福岡・ファミリー安全運転講習会
ドライバーであるお客様とともに、そのお子様にも手渡しで安全を伝える

Honda Cars 福岡は福岡県内に 41 拠点を展開する四輪販売会社である。同社では、お客様とそのお子様を対象にした「ファミリー安全運転講習会」を開催している。これは、お子様向けの『あやとりぃ※ ひよこ編（以下、あやとりぃ）』による交通安全教室と、ドライバー向けの安全ワンポイントアドバイスを組み合わせた約 1 時間のイベントだ。

同社事業管理部管理課課長の溝田敏昭さんは「当社では手渡しの安全活動を通じて、お客様とその家族を交通事故から守っていきたいと考えています。昨年度までは、交通安全教室と安全ワンポイントアドバイスを別々に実施していましたが、それを今年度からは一本化し、ご家族揃って参加しやすいようにしました」と話す。

9 月 25 日、Honda Cars 福岡 赤坂店（福岡市中央区）で「ファミリー安全運転講習会」が開催された。講習会の指導者役は同社事業管理部管理課チーフの成富潮さんが務めている。

Honda Cars 福岡 事業管理部管理課チーフの成富潮さんが子どもと対話しながら基本的な交通ルールを伝えた

講習会の前半は、子ども向けの交通安全教室。保護者も子どもたちの後ろで一緒に参加する。成富さんが「あやとりぃ」を使って、子どもたちに問いかけながら道路を歩くべき場所や歩行者用信号機の色の意味を説明。道路を横断する前は、左右をよく観るために必ず止まることを強調した。

7 歳と 4 歳の子どもと参加した母親は「イラストを使って説明してくれたので、小さい子どもにもわかりやすい内容でした。私自身も信号が青になったら、すぐに渡り始めてしまうので、今後は止まって左右を観てから歩き始めるように気をつけたい」と感想を語った。

後半はショールームの外で、お客様向けの安全ワンポイントアドバイス。成富さんが日常点検のポイントについて解説した後、車載の応急パンク修理キットを使ってタイヤがパンクした時の対処法を実演した。また、正しい運転姿勢の模範を示し、全席でのシートベルト着用を参加者に呼びかけた。

「クルマの販売だけでなく、交通安全や安全運転に関することも四輪販売会社から情報発信していくことが必要です。お客様にも Honda の安全に対する姿勢を感じていただけると思います。手渡しの安全活動を継続することによって、お客様と私たちとの距離を今以上に縮められるのではないでしょうか」と成富さんはいう。

現在、この講習会は成富さんが各拠点を巡回して行っている。Honda Cars 福岡は今後、各拠点で「あやとりぃ」による交通安全教室ができる人材を養成し、継続的に講習会を開催できる体制づくりをめざしている。さらに、成富さんらが地域の幼稚園などに出向いて交通安全教室を実施することも検討している。

安全ワンポイントアドバイスではタイヤパンク時の対処法を実演したり、シートベルトの正しい着用方法を説明

※あやとりぃ＝ Honda が三重県鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。幼児～小学校低学年対象の「あやとりぃ ひよこ編」、小学 3 ～ 4 年生対象の「あやとりぃ」、幼児～小学校高学年対象の「あやとりぃ 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者対象の「あやとりぃ 長寿編」がある。「あやとりぃ」は「あんぜんを やさしく ときあかし りかいして いただく」の略。詳細は以下ホームページを参照。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/

03 ●第 47 回全国白バイ安全運転競技大会
全国の白バイ隊員が日頃の訓練の成果を発揮

10 月 8 日、9 日の両日、自動車安全運転センター安全運転中央研修所（茨城県ひたちなか市）にて第 47 回全国白バイ安全運転競技大会（主催：警察庁）が開催された。

この大会は、全国の白バイ隊員の安全運転技能の向上、士気の高揚及び隊員相互の融和団結を図ることを目的として、昭和 44 年より実施されている。今年は、46 都道府県警察及び皇宮警察から、女性隊員 44 名を含む 194 名の選手が参加。今回は悪天候のため、トライアル走行操縦競技が中止となり、バランス走行操縦競技、不整地走行操縦競技、傾斜走行操縦（スラローム）競技の計 3 種目によって熱戦が繰り広げられた。

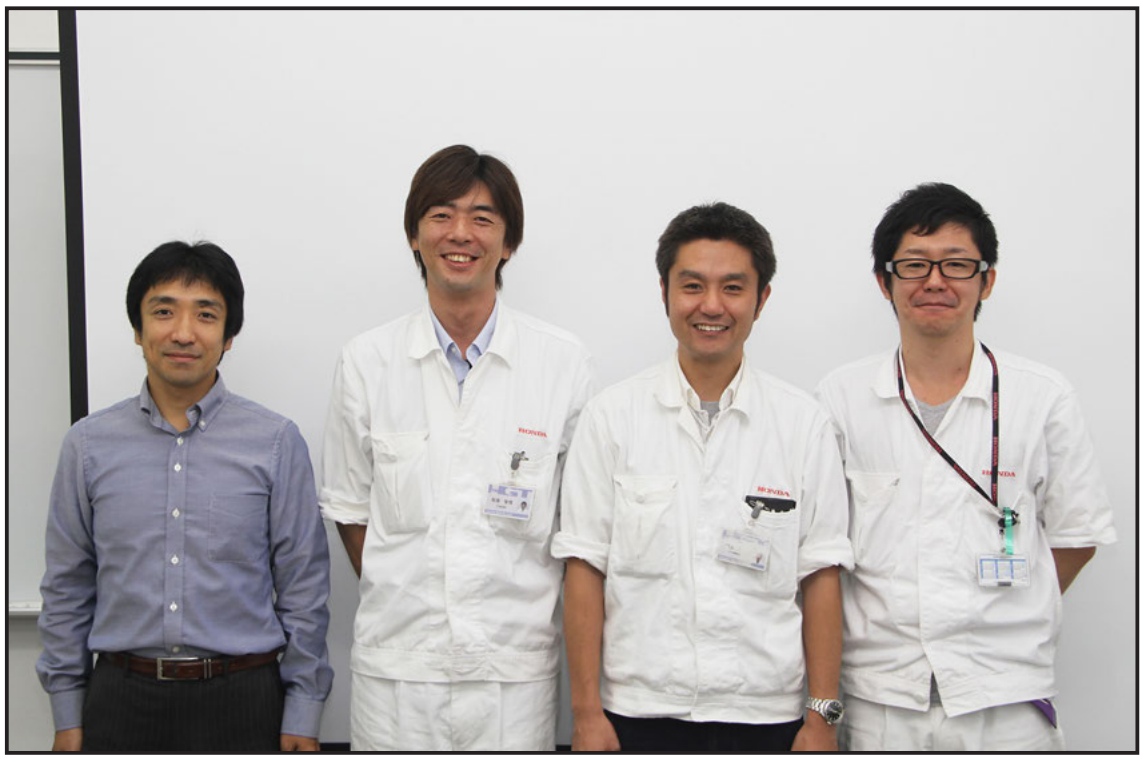
主な結果は以下の通り。

●団体の部
（第 1 部・9 都府県警察）
優勝／神奈川県
第 2 位／愛知県
第 3 位／警視庁
（第 2 部・37 道府県警察・皇宮警察）
優勝／熊本県
第 2 位／佐賀県
第 3 位／鹿児島県

●個人競技の部
（男性の部）優勝／谷口俊光（神奈川県）
（女性の部）優勝／東浦亜希子（三重県）

FRONT LINE

生活道路の潜在的危険箇所を知らせ、ドライバーの安全運転を支援する



Honda安全運転コーチング開発プロジェクト

写真左から（株）本田技術研究所 四輪R&Dセンター第8技術開発室第2ブロック・**淵脇陽介**主任研究員、**稲葉智信**研究員、**川上健太**研究員、本田技研工業（株）ビジネス開発統括部テレマティクス部サービス開発室・**鷲津公洋**チーフ

ホンダでは、安全運転の実践と習得に役立つ「安全運転コーチング」機能を車載用ホンダ純正ナビ（ホンダ インターナビ※およびインターナビ対応モデル）で提供している。

インターナビ装着車から収集した走行情報（フローティングカーデータ・以下、FCD）をホンダは日々蓄積している。このFCDをもとに、急減速が多発している生活道路の信号機のない交差点（急減速多発交差点）を抽出、「安全運転コーチング」はそこに接近すると、ドライバーに知らせ、安全確認を促すのである。

ドライバーの危険予測能力を高めるための支援をめざす

「安全運転コーチング」は2008年に川上研究員が発案したものだ。当時、川上研究員は前走車や対向車との衝突を回避支援するCMBS（衝突軽減ブレーキ）の開発を担当していた。「交通事故を減らすためにCMBSのような安全運転支援システムの普及は有効です。しかし、それが搭載できる車種は限られていました。また、CMBSはミリ波レーダーによって対象物を認識するのですが、レーダーが検知できる範囲は限られています。事故防止のためには、もっと違うアプローチも必要ではないかと思いました」と、川上研究員は話す。

そこで、着目したのがドライバーである「ヒト」だ。「機械には難しい物を認識するという作業も、人間なら簡単にできます。ドライバーの能力をさらに引き出すことができれば、より安全な交通社会になるのではないかと考えました」。

2010年、提案が認められ、開発のためのプロジェクトが立ち上がる。プロジェクトでは、ドライバーの能力を引き出し、生活道路での歩行者や自転車との事故を予防することがテーマとなった。「生活道路の見通しの悪い交差点は、レーダーが対象物を検知しにくい場面といえます。見えない場所から出てくる歩行者や自転車を守るためには、ドライバーの危険予測能力を高める支援が必要なのです」。プロジェクトは、ホンダが持つ膨大なFCDを活用して、全国の生活道路を対象に潜在的危険箇所となる急減速多発交差点を洗い出した。急減速多発交差点は単に急減速が多い箇所ということではない。走行情報に加え、交通量を加味して計算された急減速が発生する確率が高い交差点である。抽出された箇所は危険性のある交差点として妥当性があるか、1つ1つ検証したという。こうして、2013年に「安全運転コーチング」機能の提供が開始される。

安全への心がけを継続してもらうために

開発責任者の稲葉研究員は、ドライバーへの支援の方法についてもプロジェクト内で議論を深めたと振り返る。当初は、危険と思われる速度で走行するドライバーのみ知らせればいいと考えていた時期もあったが、最終的には急減速多発交差点に近づいたら常に知らせることにしたそうだ。「地元のドライバーしか知らないような危険箇所を多くのお客様に伝えたいと考えました。知り得ない情報だからこそ価値があるのです」。

今年3月以降に発売された新型車に対応したホンダ純正ナビ（メーカーオプションのみ）では、これまでの効果音とナビ画面上のテロップ表示に加え、音声アナウンスで「この先、急減速多発交差点です。安全確認お願いします」と知らせるようになった。また、急減速多発交差点で、ドライバーが一時停止とスムーズな加減速を実行すると、「安全への心がけ、ありがとうございます」という音声アナウンスも流れる。どのような一時停止と加減速が最適であるかの評価指標は、ホンダの交通教育センター（アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ）でのスクールでインストラクターが受講者の運転を評価したデータを分析して導き出したものだ。

安全への心がけを継続しやすくすることで、お客様の能力や意識を高めることにつなげたいと、稲葉研究員はいう。

利用できるお客様を増やし事故の低減に寄与する

「安全運転コーチング」を利用しているお客様の調査結果によれば、「継続して使いたい」という声が多い。また、利用者の急減速も16・6％減少しているという結果も得られている。「安全運転コーチング」はお客様の安全運転支援に役立っているといえるだろう。

その一方、現状で「安全運転コーチング」はホンダ純正ナビが前提の機能となっている。淵脇主任研究員は「利用できるお客様が増えれば事故も減るはずです」と、より効果を広げるためには純正ナビを持っていないお客様への対応も検討する必要があると考えている。鷲津チーフは「私たちが持っているFCDはホンダ車の走行の軌跡情報です。ホンダ車があまり通らない地域の潜在的危険箇所をいかに見つけ出していくかも考えていく必要があるでしょう」という。このほか、SAFETY MAP（6面参照）との連携も視野に入れて新たな価値を提供することについてもプロジェクトでは検討している。

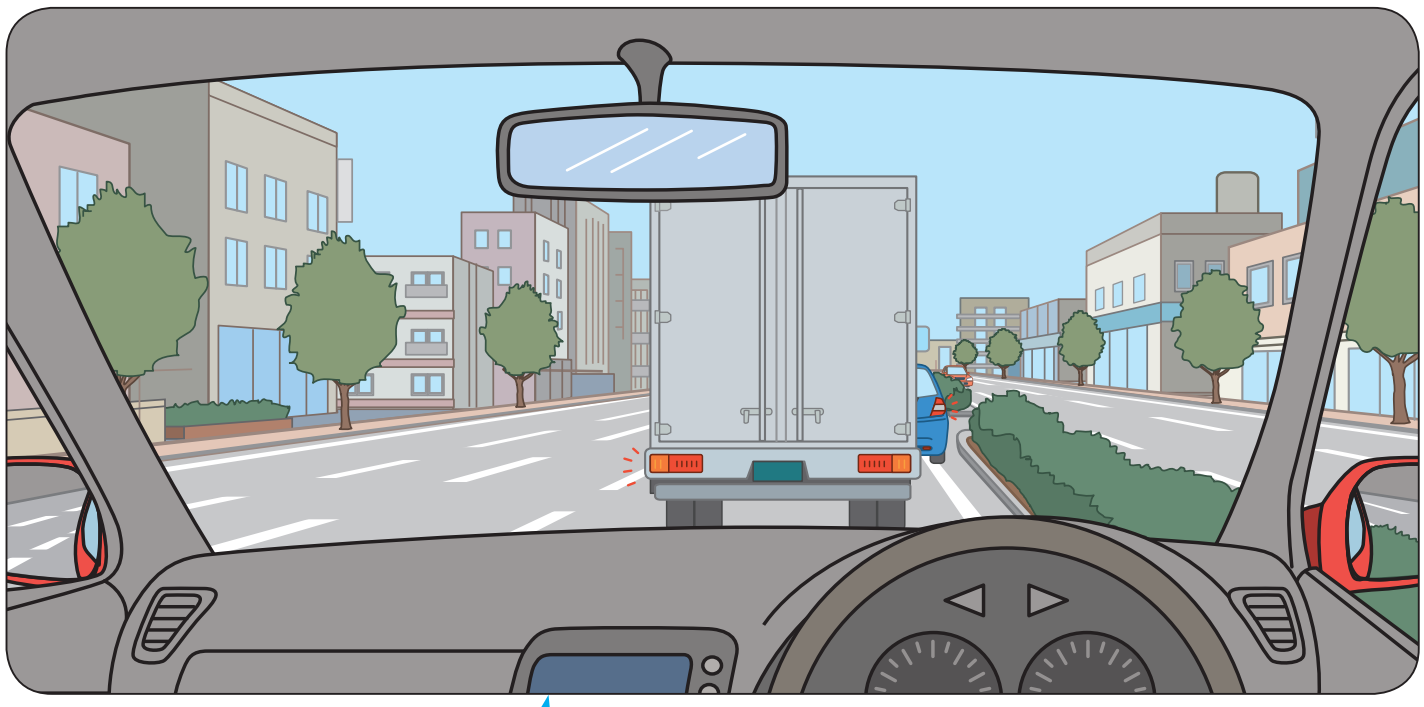
FCDというビッグデータを活用し、潜在的な危険箇所を知らせることによってドライバーの安全運転を支援するというシステムを実用化しているのは、自動車メーカーではホンダだけである。「安全運転コーチング」のさらなる進化が期待される。

Honda純正ナビ（メーカーオプションのみ）の「安全運転コーチング」機能ではドライバーに音声アナウンスで注意を促す

※インターナビ＝Hondaが開発した双方向通信型カーナビゲーションシステム

危険予測トレーニング（KYT）――危険感受性を育てる

第53回 幹線道路の右側車線を走行している時（四輪車編）



あなたは幹線道路の右側車線を走行しています。
前方を走っているトラックが
左に車線変更しようとウィンカーを出しました。

安全に通過するには、
どのようなことを予測する
必要がありますか?

交通事故を防止するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を高めるための題材を提供します。今回は四輪車のドライバーに、幹線道路の右側車線を走行している時の危険について考えてもらうためのKYTです。

活用方法

1. 少人数のグループをつくります。
2.「交通場面のイラスト」を見せながら、意見を出し合います。
3. その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつけて運転すれば良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト（カラー・A4 版）」は下記 SJ ホームページでご覧いただけます。また PDF ファイルもダウンロード（無料）できます。

ホンダ　SJ　検索

【使用上の注意】
●営利目的での利用はおやめください。
●内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
●その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。

本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL：03(5412)1736　E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

Ⓒ本田技研工業（株）

SJ クイズ

Q1

平成 27 年中の車両等の交通法令取締件数（705 万 5982 件）を違反態様別にみると、携帯電話使用による取締件数は次のうちどれでしょう?

①約 20 万件
②約 50 万件
③約 100 万件

Q2

携帯電話等使用による交通事故発生場所（平成 19 ～ 26 年合計）で最も多いのは次のうちどれでしょう?

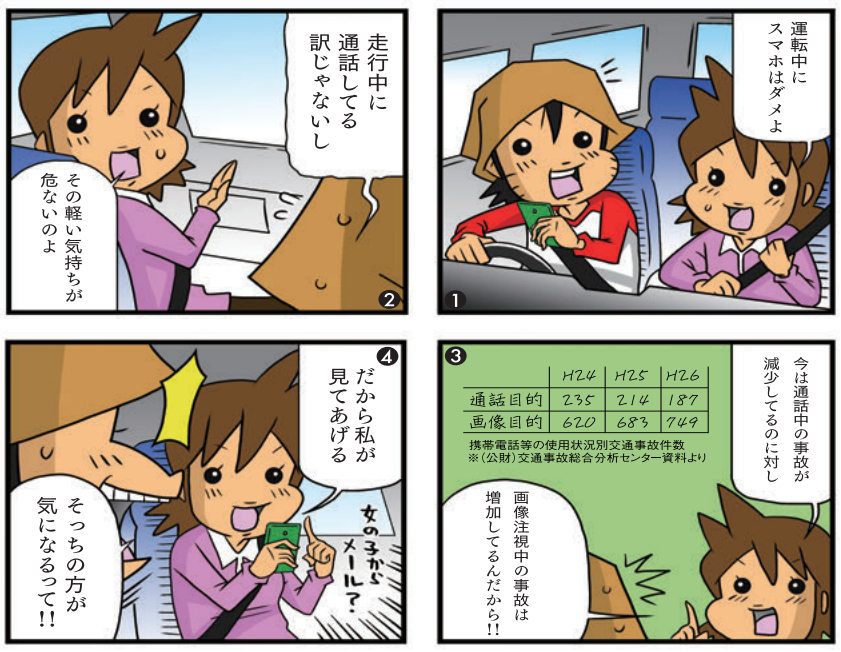
①単路（直線）
②交差点付近
③信号交差点

Q3

携帯電話使用等により交通事故を起こした四輪運転者（平成 19 ～ 26 年合計）を年齢層別にみると、最も多い年齢層は次のうちどれでしょう?

① 20 ～ 29 歳
② 30 ～ 39 歳
③ 40 ～ 49 歳

※「解答」は 8 面下、「解説」は下記 SJ ホームページでご覧いただけます。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/sj/



漫画：塚本ケースケ

Ⓒ本田技研工業（株）

指導者ファイル――34

このコーナーでは、地域で活躍する
交通安全教育に携わる指導者の方々を紹介していきます。

（一財）岡山県交通安全協会 児島交通安全協会
シルバーセーフティサポーター
松井和子さん

高齢者が積極的に参加したくなる交通安全教室をめざす

岡山県では各警察署に高齢者専門の交通指導員（シルバーセーフティサポーター）を配置している。倉敷市の児島警察署管内を担当しているのが、児島交通安全協会の松井和子さんだ。高齢者を対象にした交通安全教室は年間で約 90 回実施している。さらに、地域の人々と一緒に松井さんが中心となって、3000 軒を超える高齢者世帯を訪問し、啓発活動も行っている。

「高齢者の皆さんには家に閉じこもらずに、どんどん外に出てきてほしいと考えています。ですから、皆さんが楽しんでもらえる参加型の交通安全教室にするように心がけています」と松井さんは話す。

松井さんは「桃太郎の交通安全教室」として、桃太郎を演じる児島警察署交通企画係長の市場重利さんとの軽妙な掛け合いを通じて、歩行中や自転車乗用中の安全行動を伝えている。その中で、参加者全員で声を出したり、脳トレの教材を使って手を動かしてもらったりしている。例えば「自転車安全利用五則」を覚えやすくするために、松井さんがリズミカルに歌い、それに合わせて参加者に復唱してもらうのである。自分が熱い想いを投げかければ、参加者も熱い想いを投げ返してくれると松井さんはいう。

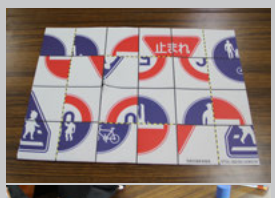
近年の老人会のイベントでは防犯や防災の話題も交えており、限られた時間で交通安全について指導しなければならず、短い時間でも印象に残すための工夫を松井さんは重ねている。

指導者の皆さんの活動を動画でご紹介
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/area/movie/

●桃太郎の交通安全教室

和装姿の松井さんと人形の桃太郎が交通ルールや交通事故に遭わないためのポイントを高齢者にアドバイスしていく。桃太郎役は交通安全講話を担当している児島警察署交通企画係長の市場重利さん

自転車安全利用五則をリズミカルに歌ったり、参加者にも協力してもらいながら、交通安全教室を進める



1枚の紙を折りたたんでいくことで、バラバラになっている標識の図柄を完成させるという脳トレ。簡単なようで意外に難しいので、参加者が夢中になるそうだ

交通安全教室の会場には反射材の素材を使った衣服や雑貨を展示。暗くした会場内で、参加者がペンライトを当てて、反射材の効果を確認する

安全な道路環境をめざして —— 16

SAFETY FOCUS

山梨県「中小河原」交差点

クルマの流れが速く、側道からの合流が付近にある交差点

「SAFETY FOCUS」は、Honda が公開している「SAFETY MAP」に示される交通上の危険が潜むスポットに足を運び、現場の交通環境と事故防止について考察する連載記事です。

「SAFETY MAP」には「みんなの意見」として一般投稿された危険スポット情報が地図上に表示されている。今回「FOCUS エリア」（下記参照）に取り上げるのは、山梨県内で 4 人の方が「みんなの意見」を投稿している「中小河原」交差点だ。
ここには、スピードが出ているクルマが多いなどの投稿が寄せられている。また、この場所では、平成 27 年中に四輪車対四輪車の事故が 5 件、四輪車対自転車の事故が 2 件、四輪車対二輪車の事故が 1 件発生している。

●この地点で発生した事故件数

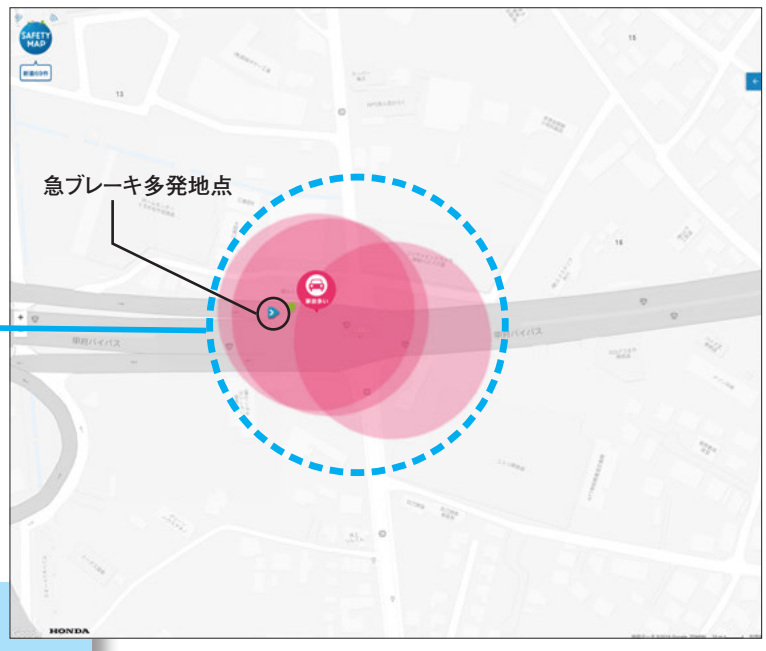
四輪車対四輪車	追突	4 件
	出会い頭	1 件
四輪車対二輪車	出会い頭	1 件
四輪車対自転車	出会い頭	1 件
	左折時	1 件

※平成 27 年中　山梨県警察提供

●「SAFETY MAP」みんなの意見

スピードが出ているクルマが多い	2 人
見通しが悪い	2 人

※平成 28 年 9 月 30 日時点



現場をたずねる

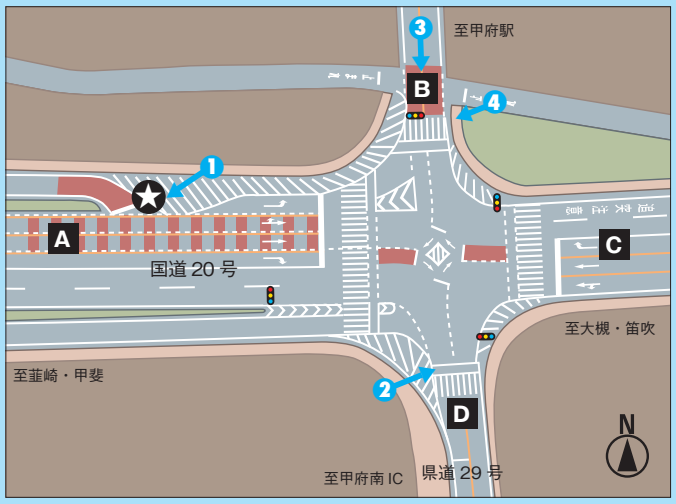
FOCUS エリア
山梨県甲府市「中小河原」交差点

今回訪れた「中小河原」交差点は JR 甲府駅から南へ約 4km の場所にある。東西に抜ける国道 20 号と甲府市街を南北に抜ける県道 29 号（伊勢通り）が交わる場所だ。また国道 20 号と平行する生活道路が北側にあり、交差点に接続している。付近には家電量販店や大型家具店、県立高校があり、1 日を通して交通量が多い。

現場を訪れた平日朝 7 時の国道 20 号は、大月方面・韮崎方面とも交通量が非常に多く、交通の流れが速い印象を受けた。A から走行するドライバーが最も注意を払うのは、交差点の 20m 程手前にある側道との合流地点★だ。通勤時間帯は交通量が多いため、国道 20 号への合流車両はすべて停止線の手前で一時停止し、目視で右後方を確認し、慎重に合流していた。しかし、国道を走行するクルマが A → B、C → D に左折する際は、見通しが良いせいか十分な減速を行わずに曲がるクルマがしばしば見られた。

一方、D から交差点に向かうクルマは朝 7 時以降、慢性的に渋滞していた。片側 1 車線道路のため、交差点内に右折待ち車両が 4 台以上溜まると、後続の直進または左折車両が通行するスペースがなくなってしまうからだ。

B の交差点入り口付近には生活道路があり、県道 29 号の停止線手前に接続している。抜け道として利用されており、赤信号待ちの際に横断歩道上で停車する場面が多く見られた。



十分な減速を行わず、国道から県道に左折するクルマ。ゼブラゾーンに進入している

右折車両が交差点内に溜まると、後続の直進・左折車両の通行スペースがなくなってしまう

A から左折専用レーンに進入する車両と側道からの合流待ちの車両が接近する様子。発進タイミングを誤れば事故につながりかねない

横断歩道上に停車して信号待ちをするクルマ

限られた時間帯に集中する歩行者・自転車利用者

「中小河原」交差点の近くには JR 身延線甲斐住吉駅があり、朝 8 時頃は県立高校に向かう生徒が歩道や路側帯に溢れかえっていた。歩行者だけでなく自転車利用者も多いが、状況によっては歩行者がクルマの通過を待つ場面があった。ドライバーは歩行者・自転車利用者を優先した通行を常に意識しなければならない。

観察時に小雨が降る時間帯があったが、中学生・高校生の自転車利用者はレインコートを使用し、傘さし運転は観察中 1 人も見られなかった。高校生でもヘルメットを着用している生徒がいるなど、安全意識の高さがうかがえた。

レインコートやヘルメットを着用する中学生や高校生の自転車利用者

通勤時間帯以外も一時停止と安全確認を

★の側道から国道 20 号の合流地点には一時停止の標識がないが、通勤時間帯はすべてのドライバーが安全のために一時停止して目視で右後方を確認している。しかし、国道 20 号の交通量が減った 9 時以降は、一時停止をせず合流するクルマが見られるようになった。交通量が減ったことで国道 20 号の交通の流れは速くなっている。側道から合流するクルマとの速度差が大きくなるので、一つ間違えれば大きな事故につながる可能性が高い。側道から急にクルマが出てくることによって、国道 20 号を走行するクルマが急ブレーキをかけることもあるだろう。一時停止の規制を設け、交通量の少ない時間帯でも一時停止と安全確認を徹底させるほうがより安全ではないかと思われた。

山梨県警察は今後、さらなる安全対策を検討していく考えだ。

ゼブラゾーンに進入しながら合流するクルマ

国道 20 号の交通量が減ってくると止まらずに合流していくクルマが増える

「SAFETY MAP」のご活用・ご参加をお願いします!
ホンダ　セーフティマップ　検索
http://www.honda.co.jp/safetymap/

「SAFETY MAP」は「みんなでつくる安全マップ」です。Honda のインターナビが集めた日本中を走るクルマの急ブレーキ情報と、交通事故情報、そして皆さんの声で地図はつくられます。お手持ちの PC・スマートフォンからアクセスできますので、あなたの周囲に危ないと感じることのある場所があったら、情報を投稿してください。

PRINTED WITH SOY INK 本冊子は再生紙に植物インキで印刷しています。
次号は 2016 年 12 月 2 日発行予定となります。

（SJ クイズの解答：Q1 ③、Q2 ①、Q3 ①）